

写真: 西小学校4年生の外国語活動授業協議会記録から(説明は7ページ)

## 巻頭言 『居心地のよい学級とレジリエンス』

教育センター指導主事 八重沢 央

居心地のよい学級づくりも3年目を迎え、不登校の未然防止に一定の成果が見られています。私は15年ほど前に不登校の未然防止や学校適応の担当になったことがありました。その時にレジリエンスの概念に興味をもち、集団が生徒一人一人のレジリエンスに影響を与えるかどうか調べたことがありました。明らかになったことは、大きく2つです。1つは、集団の凝集性(親密さ)が適度であること。ベツタリでもなく、もちろんバラバラでもない集団の状態がレジリエンスを高めていました。そして、もう1つは、集団に適度な柔軟性があること。凝り固まったヒエラルキーのようなものがなく、その時々で、柔軟に対応できる集団の状態がレジリエンスの向上に寄与していました。

かなり要約して説明しましたが、これは今取り組んでいる「居心地のよい学級」の状態に重なります。集団は違うにせよ、親和的な学級、みんながリーダーの学級、つまり居心地のよい学級は、個のレジリエンスに対してプラスに影響する可能性があります。それが不登校の未然防止に役立っていると、15年前のことを思い出しながらか強く実感しています。WEBQUの2回目が終了しました。結果に一喜一憂することなく、アセスメントをしっかりと行い、全教職員で学級づくりのアイデアを出し合い、次の手立てを打ちましよう。学級を育てることで、一人一人が伸びていきます。今年度の残りの取組をよろしくお願ひします。

レジリエンスの定義はさまざまであるが「弾力性」「精神回復力」などとされ、心理的なダメージを受けても、ストレスに柔軟に対処し、適応を果たしていく結果に影響を及ぼす能力である。

## 小中一貫教育

### ■ 地域とのさまざまなつながりの中で育つ自己有用感や主体性

十日町市の小中一貫教育では、3つの方策（教職員のつながり、児童生徒のつながり、地域とのつながり）を柱として、各校・中学校区で実践を重ねてもらっています。今回は、地域とのつながりについて、すてきななあ、と思った取組を紹介します。

中里中学校の上村校長は、2学期初めの学校だよりに次のように記しています。

今年度の2学期は、「ツールド妻有」全校ボランティアで幕を開けました。当日は酷暑が予想され、また夏休み終盤の日曜日を登校日にしての活動だったことから、保護者の皆様には大変ご心配をおかけしました。皆様のご協力もあって無事終了しましたことに、感謝申し上げます。

当日（8月25日）開会式に参加した私は、参集されている選手のみなさん一人一人が、生徒たちの応援メッセージシールをヘルメットや車体等に貼ってくださっているのを見て、胸がいっぱいになりました！選手のみなさんから、このシールが励みになったとの声がたくさん聞かれました。

生徒たちは「中里愛」を胸に、おもてなしを頑張りました！各種新聞報道でも、里中生を称える記事がありますので、ぜひご覧ください！

2学期は、大きな行事のあるとても大切な学期です。今回の経験も活かしながら、生徒たちがたくましく、自己実現を図っていけるよう教職員一同頑張っています。保護者・地域の皆様からも、子どもたちへのご支援ご協力、激励をどうぞよろしくお願いいたします。



創設者や運営担当者から「ツールド妻有」の歴史や、このイベントにかける思いを話してもらい、生徒のボランティアの意欲が高まりました。総合的な学習の時間を活用して中里中学校では「ツールド妻有」のコースを回ったり、参加する選手のヘルメットに貼ってもらう応援メッセージを「中里愛」を込めて書いたりしました。参加する選手宛てに様々な文書を封筒に詰めるボランティアも行いました。たくさんの人たちが喜ぶ姿を見たり、感謝されたりする活動は、子どもたちの自己有用感を高めたことと思います。

吉田小学校では、11月9日（土）に大収穫祭を行いました。この日はアントレプレナーシップ教育の実践発表を兼ねて行ったので、県教育庁総務課の主任と一緒に発表会に参加しました。アントレプレナーシップ教育は、従来「起業家精神を養う教育」と解されてきました。新潟県教育委員会では、これを「様々な社会変化の中で、主体性をもって課題に挑む人材を育成する教育」と定義しています。学校現場では、この10年間に子どもたちの学習環境が大きく変化しました。GIGAスクール構想によって一人1台の端末

が整備され、疑問をいち早く調べることができるようになりました。また、授業では、知識を身に付けるだけでなく、知識をどのように使うかが大切になってきました。

県のホームページでは、これまでのキャリア教育をアントレプレナーシップの視点に立って見直すことを勧めています。

**CLICK** 新潟県では、児童生徒を主語に次の4点が  
アントレプレナーシップ教育に必要な視点だと考えています。

### 自ら課題を見つける。

主体的に課題を見つけることを原動力とし、その解決に向かって試行錯誤する過程で成長します。

### 実社会（地域）とつながる。

実社会の課題に挑戦することで、多面的な視点で物事を考えることを学びます。

### 失敗体験から学ぶ。

失敗から学び、あきらめずに別の解決策を見出すことで、自己肯定感・自己効力感が高まります。

### 社会に新たな価値を提供する。

課題を発見し、その課題に取り組む過程で大切な視点は「誰かの役に立つ」という視点です。

吉田小学校では、この視点に立って生活科総合的な学習の時間のカリキュラムを見直して、地域とのつながりを生かした実践をしてきました。地域の農家や起業家から志を学び、探究学習を深めてきました。失敗も決して無駄な経験ではなく、失敗から学ぶことも多いのです。吉田小学校では、昨年度の収穫祭の失敗からも今年度の活動からも子ども達が失敗から学ぶことを支援してきました。子どもたちも昨年度できなかったことやうまくいかなかったこと等を振り返り、今年はどうしたい、という思いをもって取組を進めてきました。安全面の配慮は必須として、子どもが主体的にやりたい学びを保護者・地域・支援団体と連携して支えた教育活動です。

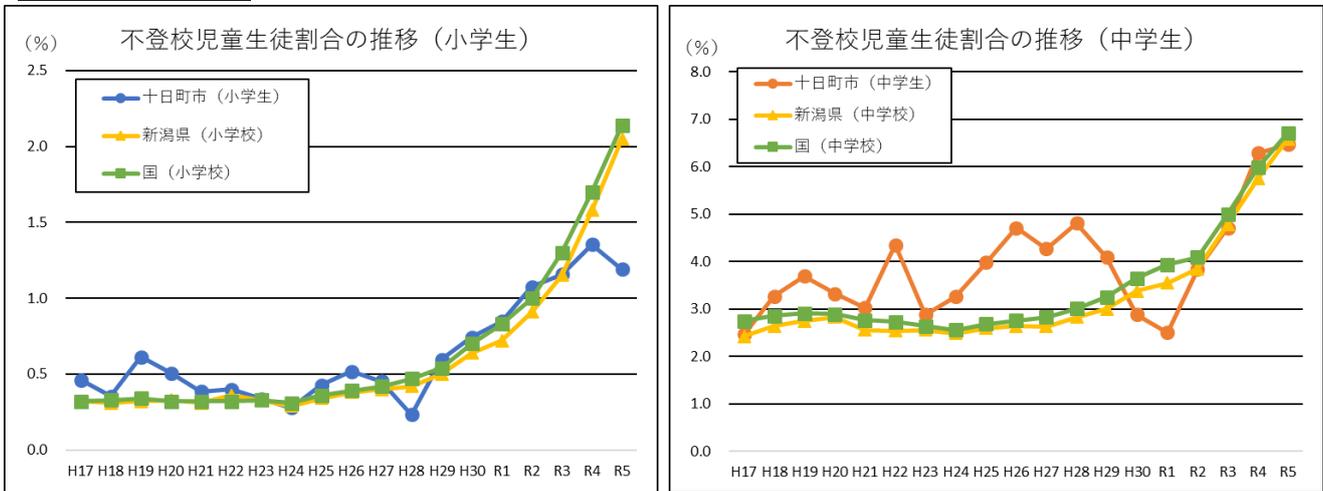


# 教育相談班より

## 令和5年度不登校・いじめ認知の状況(国・県との比較から)

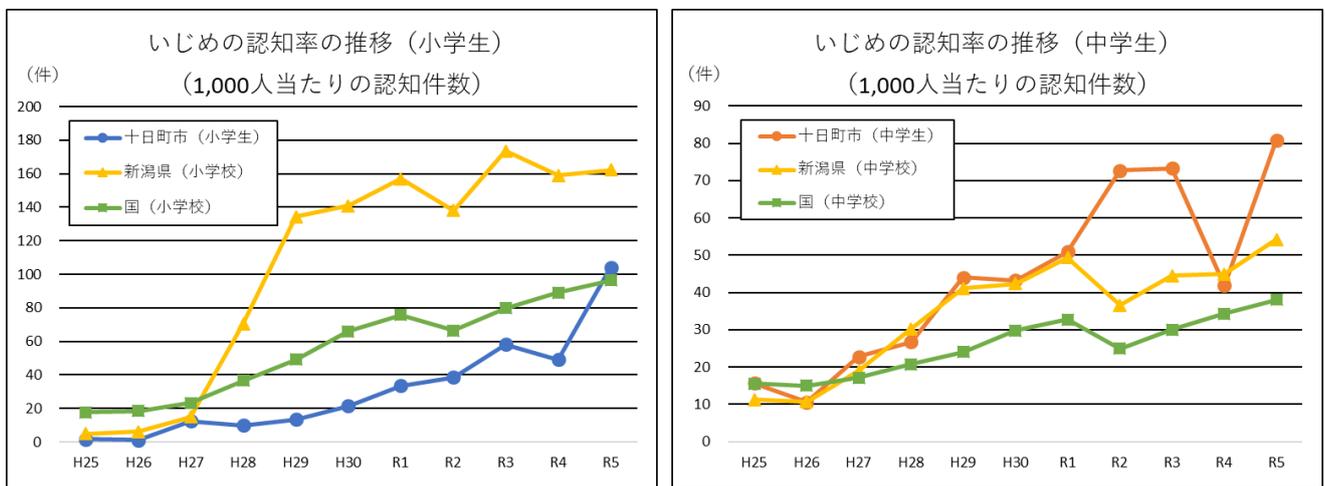
10月31日、文部科学省より「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果が公表され、国や県の状況が明らかになりました。

### 不登校の状況



不登校児童生徒の割合は、国・県ともに増加傾向となりました。十日町市については、小学生では減少、中学生ではわずかに国・県を下回りました。各校における不登校対策（校内教育支援センター〈適応指導教室〉の設置や、児童生徒一人ひとりの実態や特性に応じたきめ細やかな対応、WEB-QUを活用した「居心地のよい学級づくり」など）が実を結んできた成果ではないかと思えます。

### いじめの認知状況

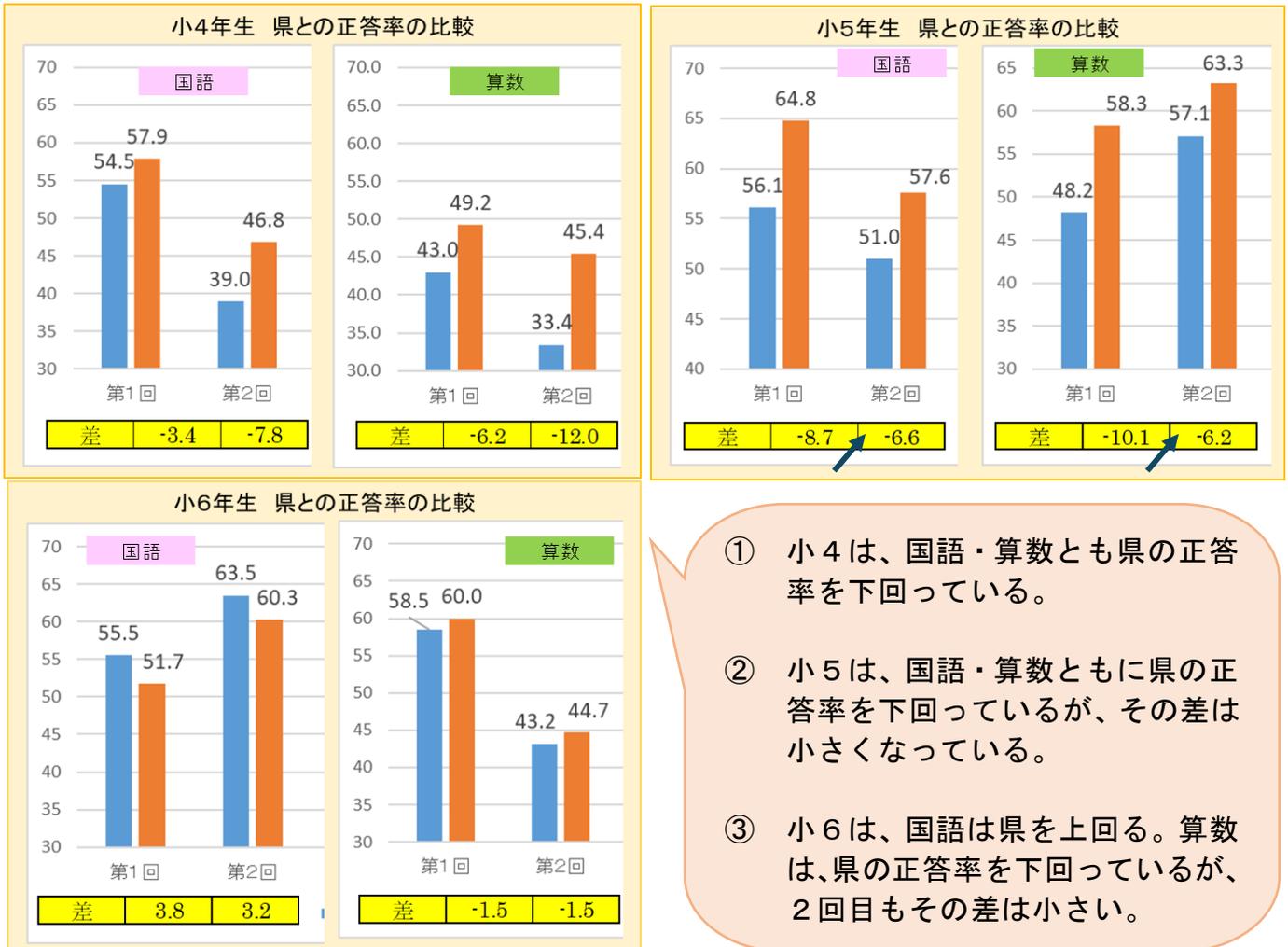


1,000人当たりのいじめ認知件数については、国は緩やかな増加傾向、県は国に比べ認知率が高くなっています。十日町市は、小学生において初めて国を上回り、中学生においては国・県を大幅に上回りました。文部科学省は、「いじめの認知件数が多い学校について、『いじめを初期段階のものも含めて積極的に認知し、その解消に向けた取組のスタートラインに立っている』と極めて肯定的に評価」しています。一方、「いじめを認知していない学校にあっては、放置されたいじめが多数潜在する場合もあると懸念」しています。（文部科学省児童生徒課長通知より）今後も、いじめ防止対策推進法を元にした「いじめ」の積極的な認知、チームとしての対応、認知後の見守り、3か月を目安とした解消の確認など、各校における取組を確実に行っていただきたいと思えます。

## 学習指導班より ■ にいがた学びチャレンジ 第2回の結果

グラフは、2回目のにいがた学びチャレンジにおける市と県の正答率の比較です。

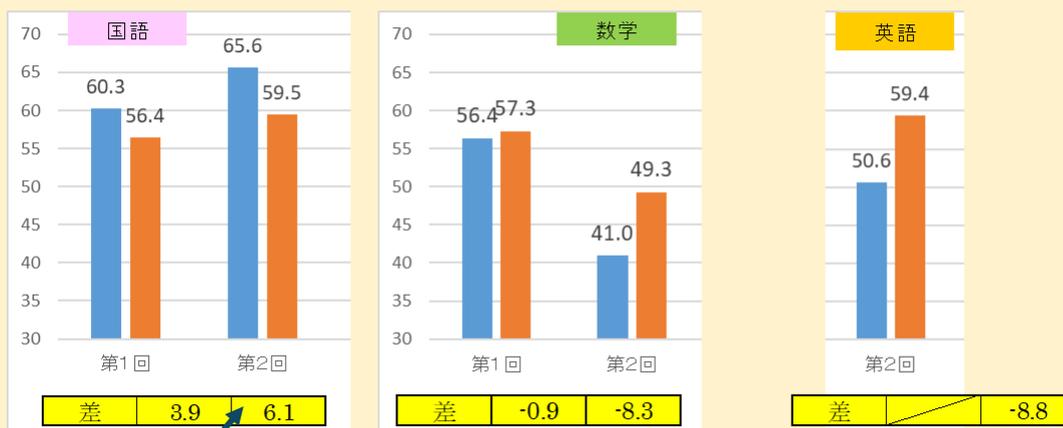
4月のNRT学力調査だけでは、日頃の取組の成果を把握することは、なかなか難しい面があります。2カ月に1度実施されるにいがた学びチャレンジの取組を生かし、学力の状況把握とともに対話的な学びと振り返りを通して、児童生徒の学力定着に努めてください。3回目・4回目に向わしていくことで、次のNRTの結果にも繋がると思っています。下の棒グラフでは青は市の正答率を、オレンジは県の正答率wを表しています。以下のグラフでは、青は市、オレンジは県の平均正答率を表しています。



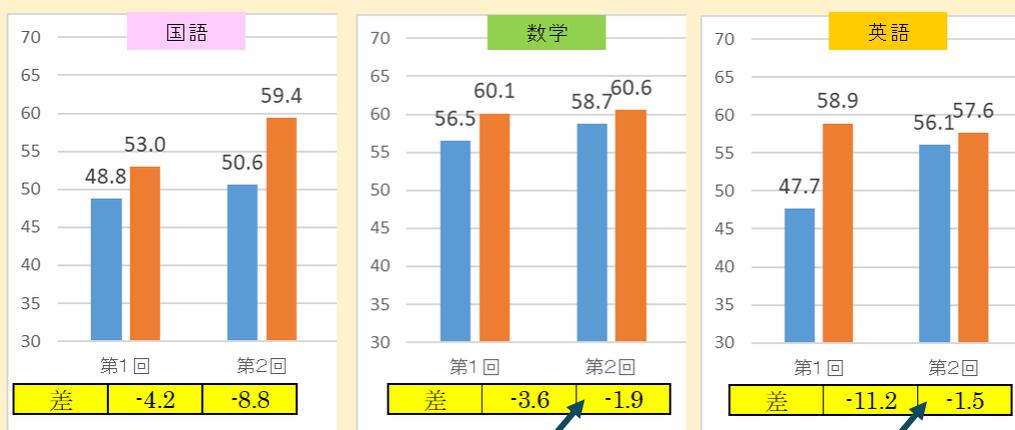
- ① 小4は、国語・算数とも県の正答率を下回っている。
- ② 小5は、国語・算数ともに県の正答率を下回っているが、その差は小さくなっている。
- ③ 小6は、国語は県を上回る。算数は、県の正答率を下回っているが、2回目もその差は小さい。

- ① 中1では、国語が県の正答率を上回り、2回目の方がより上回っている。一方数学は、県を下回る傾向が続いており、その差が大きくなった。英語も県を下回っている。
- ② 中2は、全教科で県の正答率を下回っているが、数学と英語は県との差が小さくなった。一方で国語の差が大きくなった。
- ③ 中3では、全教科で県の正答率を下回っているが、国語でその差が小さくなっている。数学と英語はその差が若干広がった。

### 中1年生 県との正答率の比較



### 中2年生 県との正答率の比較



### 中3年生 県との正答率の比較



学年や教科によって、学力の定着が図られてきている状況が見られます。日々の授業のおわり、単元のまとめなどで、何をどこまで理解しているのかしっかりと評価し、定着に課題があるところは、改めて学習しなければなりません。以前、UA16%以下を目指す取組や全国学力状況調査に係る取組について、各校の学力向上策を報告いただきました。その策を全校体制で徹底できるかどうかが鍵です。今年度も、残り4か月程度となりました。引き続き、学力の向上・定着に向けて確実な取組をお願いします。

### 【表紙写真の説明】

9月12日(木)に南中学校区の授業公開研修が市教育センターの外国語サポート訪問を兼ねて行われました。西小学校の4年1組が外国語活動の授業を公開しました。川治小学校・南中学校の先生方も授業参観・協議会に参加し、熱心な討議が行われました。

授業は、子ども達がパフェの材料をいくつかの店を回って買い集める場面設定をし、買う側と売る側の会話を交互に経験する内容です。用いる会話パターンは、

店 What do you want?	客 I want ○○(パフェの材料).
店 How many?	客 ◇(数) please.
店 here you are.	客 thank you.

ですが、あいさつを交わしたり、数を指で示したりすることも推奨しました。会話では、まず教師と教師が会話モデルを示して児童に見通しを持たせます。ペアで練習を十分にしておいて、子どもの会話モデル(やりたいペア)を示します。店側と客側に別れ、店側は店頭で売るものを並べ、客側は買うものを話し合います。買い物の場面では、商品を客に手渡すことをせず、客は買ったものをタブレット撮影するので、商品が店頭からなくなることがありません。ですから子どもたちは様々な店で繰り返し会話を楽しむことができます。会話に抑揚・身振り・手振り・表情が加わり、コミュニケーションの質が高まりました。

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を図ろうとする意志と実践意欲を感じた授業公開でした。

今回授業風景ではなく、協議会記録(ファシリテーショングラフィック)を載せたのは、「私たちはこの授業から何を学んだのか」をベースとして協議が行われたことを強く感じたからです。私たちは、これまで授業協議会というと、とかく批判的な目で授業を検討したように思います。そこから学んで教員としての資質・能力を伸ばしてもらった思いはありますが、授業から学んだことを共有する研修スタイルのほうが学校にとっても中学校区にとっても生産的だと思います。

小学校・中学校が互いに授業を公開し合い、学び合って、よりよい小中一貫教育を推進することを願ってやみません。